

オリンピックの友情とソマリア内戦

中川 恵

武蔵野大学国際総合研究所客員教授
羽衣国際大学 現代社会学部教授



東京大学学術博士。ムハンマド五世大学（ラバト）客員研究員、日本学術振興会特別研究員、在チュニジア日本国大使館専門調査員、明治大学国際総合研究所客員教授等を経て、現職。専門は中東北アフリカ地域研究。特に北アフリカの政治史・現代政治を専門とする。2011年11月、2016年10月のモロッコ王国議会選挙では、国際選挙監視員を務める。

オリンピックのマラソン競技は、猛暑の東京を避けて札幌に場所を移しての開催であったが、北海道でも異例の暑さが続き、前日になってスタート時間が1時間早められて、午前6時に開始された。

ゴール目前、オランダのナゲーエ選手が何度も振り返り、ベルギーのアブディ選手を手招きし励まし、銀と銅のメダリストとして表彰台に並び立った。二人は現在代表する国は異なるが、もとはソマリア出身で、ともにトレーニングをした仲間であった。

8月の猛暑に加えて、ワクチン接種が進まず、さらなる感染拡大が懸念される中で開催された東京オリンピックであった。実際、大会期間中の8月5日には、東京の感染者は過去最高の5042人を記録した。また、ロゴマークの盗用疑惑など数々のスキャンダルに見舞われた異例づくめのオリンピックでもあったが、男子マラソンの二人のストーリーは心温まるものであった。

ソマリアの首都モガディシュ出身のナゲーエ選手（1989年生）は、6歳のとき兄とともに祖国を離れオランダに移り住んだ。4年後、兄に連れられシリアで3年過ごした後、ソマリアの両親のもとに戻ったが、祖国を再び後にし、エチオピア

経由でオランダに逃れ、里親に育てられた¹。

¹ <https://www.nnruntime.com/team/abdi-nageeye/>（最終確認日 2021年8月13日）

一方、同じく1989年生まれの32歳であるアブディ選手は、8歳の時家族とともにジブチに移住し、のちに母親はベルギーで働くことになった。当時ジブチにはベルギー大使館がなかったため、母親以外の家族がベルギーに移住するにあたって1年半を要した。アブディ選手は、ベルギーに深夜に到着し家族が再会できた時の喜びは忘れられないと、後にインタビューで語っている²。

ソ連とアメリカの狭間で

二人の祖国ソマリアは、いわゆる「破綻国家」である。1980年代後半から始まる内戦に起因するものだが、その端緒は隣国エチオピアとのオガデン紛争であった。1977年にエチオピアで革命が発生したことに乗じて、ソマリ人の居住するエチオピアのオガデン地方の奪回を目指してソマリアが侵攻した。ソマリ人はイタリアとイギリスによる植民地支配から独立する過程で、エチオピア、ソマリア、ケニアの三カ国に分断されていた（図1）。

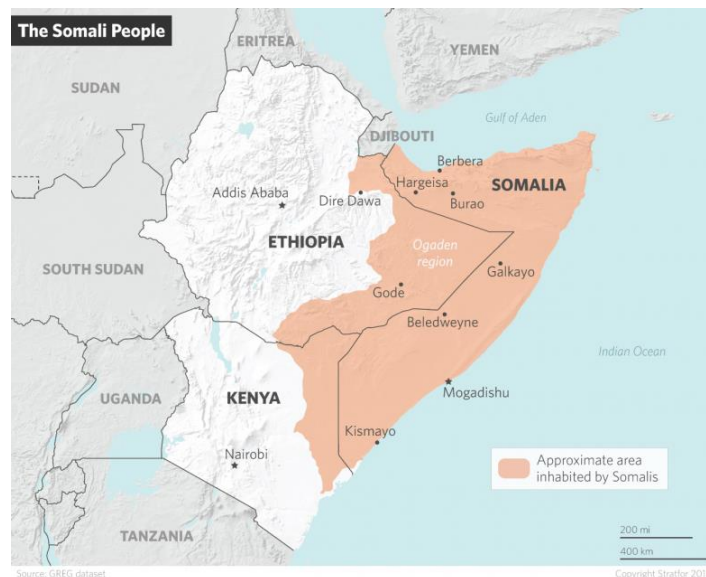


図1 東アフリカ地図（エチオピア東部のオガデン地域、ソマリ人居住地域＝赤色部分）

（出典：Stratfor）

エチオピアで共産主義政権が樹立したことによって、ソ連はそれまで支援していたソマリアを裏切り、オガデン戦争でエチオピアを軍事支援し勝利に導いた。エチオピア政府の弾圧対象

² <https://olympics.com/tokyo-2020/olympic-games/en/results/athletics/athlete-profile-n1401953-abdi-bashir.htm>（最終確認日 2021年8月13日）

となったオガデン地方のソマリ人はソマリアに流入し、多くの難民が発生した。

この戦争を機にソマリアは米国からの軍事援助に依存するようになる。さらに1979年のイラン・イスラーム革命の成立は、アメリカの中東・アフリカ政策を転換させ、スエズ運河から紅海を經由してインド洋に抜ける戦略的要衝であるソマリア北部のベルベラに、米軍基地が置かれた。以降、ソマリアは、軍事、経済、難民の諸分野で、アメリカを初めとする西側諸国からの援助を受けることとなった。

1980年代後半になると、バーレ長期政権に対する不満と大統領の後継者問題から反政府運動が活発化し、内戦状態となった。そして1989年に冷戦が終結すると、アメリカはバーレ政権の人権侵害を理由として、1990年すべての援助を停止した。これは長年援助に依存していた政権にとって致命的となった。翌1991年1月には反政府勢力である「統一ソマリ会議」が首都を制圧し、大統領は追放された。暫定政権が成立したが、長年開発から取り残され、オガデン戦争による難民が大量に押し寄せた北部地域は、首都モガディシュに対する不満から、ソマリランド共和国として、同年5月に「独立」を宣言した(図2)。但し、独自の憲法や議会、軍を持ち、選挙を実施し、ソマリアのなかでは比較的治安が安定しているといわれるが、中華民国(台湾)、エチオピア、ジブチなど限られた国・地域と外交関係を有するのみで、国際社会から承認はされていない³。



図2 ソマリランドの位置 (出典：The Economist)

『ブラックホーク・ダウン』

その後、国連安保理は PKO である国連ソマリア活動として、米軍を中心とした多国籍軍を二度派遣したが、映画『ブラックホーク・ダウン』(リドリー・スコット監督、2001年)にも

³ <https://www.economist.com/middle-east-and-africa/2020/10/03/somaliland-and-taiwan-establish-diplomatic-ties> (最終確認日：2021年8月15日)

描かれた、1993年のモガディシュでの激しい戦闘の結果、米軍は兵士18名を失った他、多数の負傷者を出して撤退し、次いで国連もすべてのPKO部隊を撤退させた。

南部では、アフガニスタンのターリバーンにも似た原理主義運動である「イスラーム法廷」が結成され、自警団的組織として支持を拡大し、2006年には首都を制圧するに至った。イスラーム原理主義運動による首都制圧に危機感を持った隣国のエチオピアが軍事介入し、支援を受けた暫定政権が翌年首都を奪還した。しかし、もともとエチオピアに対して否定的な感情を抱くソマリア国民も多く、エチオピア軍に守られる形の暫定政権による統治が安定するはずもなかった。混乱するなか、再びエチオピア軍とイスラーム法廷会議の間で戦闘となり、国連の仲介で停戦が実現したのは、2008年のことであった。

アッシャバーブの脅威と大早魃

しかしイスラーム法廷会議内の若年層の組織であった「アッシャバーブ」(アラビア語で「若者」の意)が、ソマリア南部で勢力を拡大、一時はモガディシュを包囲するに至った。

さらに2010年からは60年に一度といわれた大早魃に見舞われ、ソマリアを含む東アフリカ一帯で1200万人以上の生活が脅かされる人道危機が発生し、国土の荒廃が進んだ。

2011年に暫定政府軍がケニア軍の支援を得たことで、アッシャバーブを一時よりは弱体化させ、翌年には正式な選挙を経て、国際社会から認められる政府が発足した。しかしその後もテロが続き、2017年10月にはモガディシュでアッシャバーブによる爆弾テロで500名以上が死亡した⁴。2021年に入ってからだけでも、アッシャバーブは少なくとも4件のテロ事件を起こしており、依然勢力を維持している。

むすびにかえて：イブン・バットゥータの見た豊かなモガディシュ

冒頭で述べたアブディ選手は1999年頃にベルギーへ、ナゲーエ選手は2002年頃にオランダへ、まさに内戦只中のソマリアから逃れ、共に励まし合いながらトレーニングに励み、今夏のオリンピックでメダルを手にしたのであった。

「崩壊国家」となったソマリアには、かつてインド洋交易の拠点として栄えた時代もあった。14世紀のモロッコ出身の大旅行家であるイブン・バットゥータは、イエメンのアデンから4日間船に乗り、現在のジブチとの国境にほど近いソマリア北部の港湾都市ザイラウに到着した。その後「アフリカの角」の部分で15夜かけて航海し、マクダシャウ(現在のモガディシュ)に着き滞在した。

⁴ Reuters, “Death toll from Somalia truck bomb in October now at 512: probe committee” Dec.1st, 2017(<https://www.reuters.com/article/us-somalia-blast-toll-idUSKBN1DU2IC> 最終確認日2021年8月14日)

海洋貿易によって栄えるこの街で、バットゥータは、その地を治めるスルタンに、商人より格の高い法学者として遇された。スルタンは当地の法官に、バットゥータを「学問を求める人たちを接待するために用意された会館」である「ダール・アッタラバ（学徒会館）」に宿泊するよう案内させた。この会館は「スルタンの館の近くにあつて、内部は絨毯が敷き詰められ、必要なものがすべて整っていた」。そして食事が供される。記録には「彼らの食事は、バターで炊いた御飯であつて、それを大きな木製の皿に盛りつけ、その御飯の上にはターシャーンの料理が添えられる。このターシャーンとは鶏肉、牛肉、魚と野菜（など）のおかず料理のことである。また彼らは未熟のバナナをミルクで煮て、それを皿に盛ったものや、凝乳を皿に入れ、それに漬けたレモン、酢と塩で漬けた粉胡椒、緑生姜やマンゴーを添えたものを出す。マンゴーはりんごに似ているが、それには核があつて、熟すと、とても甘く、他の果実類と同じようにして食べるが、それが熟す前にはレモンのように酸っぱいので、酢漬けにする。彼らは御飯を一口食べると、そのあとにこうした塩漬けや酢漬けもの類を食べる。マクダシャウの住民の一人（が食べる食事の分量）は、われわれ（旅仲間の）全員が食べる量に匹敵するほどであつたが、それは彼らの普通の食べる量なのである。従つて、彼らは極端に身体が大きく肥満になる」とある⁵。

ここに描かれているのは、現在とは大きく異なる豊かで平和的なモガディシュの風景である。その豊かさと、戦略的な要衝である地理的条件は、ヨーロッパ諸国を惹きつけ、植民地支配へとつながつた。そして独立の際、民族構成を無視して策定された国境線が、その後の不安定さの一因となつたことは否めない。しかしかつての豊かさを取り戻すには、その国境線の枠内で、民族間の融和をはかりつつ、地域の自律性を尊重する連邦国家として、「互いに励まし合いながら」歩みを進めるほかないだろう。

⁵ イブン・バットゥータ『大旅行記3』家島彦一訳、平凡社東洋文庫、140-141頁、1998年。